スケッチ＆ワークブックを使う皆さんへ

思い通りに絵が描けたり作品を作ることができたらいいなあと思いませんか？
たとえば、実物そっくりに描いたり、また、特徴を思いっきり大げさに表してみたり。自由気ままに描いてみたり。
絵を描くときに大切なことは、何をどのように描きたいか頭の中に思い浮かべることです。そして、自分が表したい表現に挑戦してみることです。

絵の描き方は、こうしなくてはいけないというルールはありません。描き方は自分で探していくのです。このスケッチ＆ワークブックでは、ちょっとした技法やテクニック（技術）を試しながら、それらがどんな所に使えるか考えたり、発見したりしていきます。
ワークブックを通して身につけたテクニックや、新しく発見した技法を、自分の作品に生かしてみましょう。

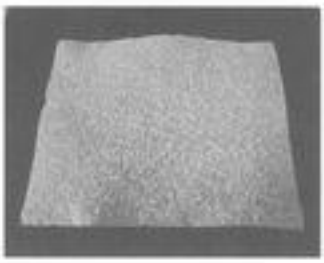
なにこれ？
顕微鏡で見たの？

このスケッチブックに入っている紙を使って作ったんだ。

えっ？
岩が浮いてるみたい。

どうやって写真を撮ったかわかるかな？

これは？



上の写真で使った紙にアイロンをかけて伸ばしたんだよ。

© Misako Kasumi

①表現とは、自分なりの主題を持って、その主題を形や色などの造形要素を扱いながらイメージを作り出していく活動です。具体的には、「頭に思い浮かべること」(発想・構想)と、「自分が表したい表現に挑戦してみること」(創造的な技能)が、学習指導要領に示されています。

②創造的な**技能**とは、表したり伝えたい思いを、どのようにしたら効果的に表したり伝えたりすることが出来るかを考えながら、様々な材料や道具、技法を、目的に応じて使いこなし、思い通りに表す**能力**のことを言います。生徒自身の表したい内容によって、必要であれば効果的に表すための技術の習得もさせなくてはなりません。ただ、注意することは技術至上主義にならないことです。例えば、画家は石膏デッサンをマスターしていないと絵が描けないのかを考えれば、それは明白なことです。決してそのようなことはありません。よって、技能と技術の違いは、**技術**は、自分の思いを効果的に表すために必要な**術**(手わざ)を指し、技術の習得は本来、一人一人の必要性に応じて習得していくものと考えることができます。

創造的な技能の習得には、生徒が十分に試行錯誤(実験)をし、自分らしい技法を発見したり、その技法を生かす技術を身につけていく必要があります。一斉指導で一つの技術を訓練させる事が、自分らしい価値判断や技能の取得を妨げることがあるので十分注意が必要です。

③トレーシングペーパーを使っています。ここでは材料との関わりを考えさせることができます。揉んだトレーシングペーパーから、面白い形を発見させて、光に透かせたり、重ねたり、彫刻のように黒い台紙に立たせたり、様々な活動が出来ます。

これらの活動は、材料からの発想・構想をふくらませる活動であり、また、造形体験として創造的な技能に関連した素材の活用能力にもつながります。

④クイズにすると良いでしょう。この写真の背景は空です。まるでマグリットの「ピレネーの城」のようです。この写真はトレーシングペーパーを窓ガラスにセロハンテープで止めて撮影しました。③の応用編です。生徒に好きな背景を探させて、写真を撮らせても面白い授業になるでしょう。その際、写真には必ず題名をつけるようにさせましょう。指導要領の〔共通事項〕のイメージに関係し、そのまま鑑賞活動にもなります。また撮影では、光の当て方でトレーシングペーパーに様々な表情をつくり出すことができます。この光の操作も創造的な技能に関連します。

⑤このトレーシングペーパーはスケッチブックから切り離した時にはしわのない綺麗な状態でした。③④に続いて、最後にまた平面に戻してみましょう。手で揉んだトレーシングペーパーにアイロンをかけて伸ばしてみると、最初の状態とはまた違った美しさが現れます。

1枚の紙でも手を加えることで、それまでと全く異なる表情が現れたり、思いがけない使い方や利用方法が発見できます。このように、材料に手を加え、材料の持つ魅力を最大限に引き出す経験が「発想・構想の能力」や「創造的な技能」の習得につながります。

このスケッチ＆ワークブックには、ワークシートと、次の７種類の紙が入っています。

□画用紙　７枚…水彩画や鉛筆画に適しています。
□クロッキー用紙　１２枚…鉛筆やペンでのクロッキーに使います。
□半紙（書道紙）　３枚…主に書に使われる紙。水墨画にも使います。
□画仙紙（がせんし）　３枚…水墨画（すいぼくが）などで使われます。
□色画用紙（黒）　２枚…白や明るい色のチョークやコンテで描くときに使います。
□色画用紙（灰）　１枚…白でも黒でも描くことができます。
□トレーシングペーパー　３枚…下絵を写したり（転写）するときに使います。

でもね、実は決まった使い方はないんだよ。大切なのは、自分の表したい思いにあわせて紙を選ぶことなんだよ。このスケッチ＆ワークブックでいろいろな使い方を探してみよう。使いたい紙がここになかったら、自分にあった紙を探してみよう。身近にある紙を集めてみてもおもしろいね。世界には数え切れないほど多くの紙があるんだよ。

さあ、絵を描く準備体操をしよう。
名づけて**『３分間１本勝負！』**３分かけて、切れ目のない１本の線を描いてみよう。
その前に、どんな線にしようかな。まず、頭の中に完成した状態をイメージするんだ。力強い線？弱々しい線？怒っている線？泣いている線？笑っている線？ゆっくり描こうかな、激しく描こうかな…。

まずは、じっくり考えて題名を決めてみよう。さあ、題名が決まったら、１本の線に挑戦！

描き始める前		描いている途中		鑑賞
どんな線にしようかな（主題） 何を使って描こうかな（用具） 思い浮かんだイメージを 形にしていくための （発想・構想）	→	いい感じ（鑑賞） もっとこうかなあ （視覚・身体感覚） （発想・構想） 描きながら、思い浮かんだイメージに近づけていく（創造的な技能）	→	こんな感じ / ここいいね / やっぱり題名は○○かな （鑑賞の能力） （言語活動）

題名 _____

★みんなで１本の線の発表会をしてみよう。どんなことに気づくかな？

© Misawa Kazumi

このスケッチブックに入っている紙の一般的な用途について記載しています。

中学校の美術を学ぶ上で、紙はもっとも身近な材料といえるでしょう。しかしながら、その種類の多さや特徴についてはあまり考えたことがないと思います。私たちの生活は実に多くの紙に囲まれています。紙を知ることは生活の中の美術に関して学ぶことにもつながります。

紙の歴史

紙は今から約二千年ほど前に中国で発明されたといわれています。当時の紙は、麻などの繊維のくずをもとに作られました。やがて８世紀の唐の時代になると樹皮や竹、藁などから今日に近い紙が作られるようになりました。当時の紙は非常に高価で貴重なものであったと記録に残っています。そして、そのような紙は、その後人々が何百年もかけ知恵や工夫を重ね、用途にあった紙へと改良を重ねたり、製法や原料を工夫したりして今日の紙が出来上がりました。そのように考えると、紙１枚にも壮大な歴史があり伝統や文化が隠れている事が理解できます。

たった紙１枚でも、その紙を製造するためには何十年も育てた樹木を使わなければなりません。また、紙を作る過程では、何人もの人の手を経て出来上がってきています。そのように、ものの背景（文化）を知ると、紙一枚でもまた違った見方が出来るようになるかもしれません。

このワークは、たった一本の線を引くことで、一人一人の個性を感じたり、表現することの意味について考えてみるワークです。

例えば、どんなでたらめな線でも、そこにはでたらめに描こうとした描く人の意志が働いています。よって、描かれた線は、その時の自分自身が正直に現れている線であり、自分の分身と言えます。ですから、誰もが自分を大切に思っているように、自分自身が生み出した作品についても大切に扱う気持ちを育てる指導が重要です。

また、美術は自分自身と対峙し自己を深めていく教科でもあります。そのためには、自分の作品を客観的に見直し、自分自身の気持ちに気づいたり、また、友達の作品を真剣に見ることで他者の思いを感じたりできるようにすることが大切です。

このワークでは描き終わった後の鑑賞の時間が重要となります。お互いに、描いた線を鑑賞し合い、感じたことを話し合うことで、共通事項の、ア「形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること」イ「形や色彩の特徴などをもとに、対象のイメージをとらえること」を深める学習ができます。その際、生徒が感じたり発見したり、気づいたりしたことを認め、確認させていく指導が大切です。教師が一方的に解説を加える指導は避けたいものです。

思考・判断・表現

まず、どんな線を描こうか、どのように描くか、何を使って描くかを考えます。また、描き始めたら、その線を見ながら筆跡を確認し、思い通りに描けているかを判断し、軌道修正したり、さらに思いを込めたりして描き続けます。このプロセスは、まさに表現と鑑賞が同時に展開されている場面であり、発想・構想の能力と、創造的な技能が関連しながら伸びていく場面でもあります。線一本でもそこには重要な能力を発揮している生徒の姿が見られます。

水彩絵の具に挑戦（その 1）

水彩絵の具は、顔料を水で溶けるアラビアゴムという糊で練って作っているんだ。油で練ったものが油絵の具だよ。糊の種類によって絵の具の名前が変わるんだ。たとえば、卵を使って描くテンペラ画というものもあるんだよ。

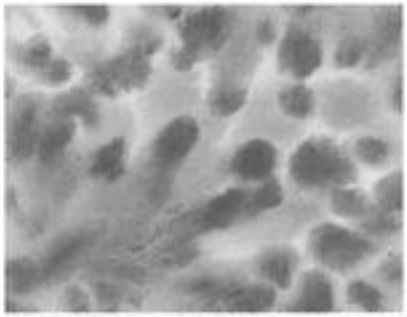
水彩絵の具は水の使い方でいろんな描き方ができるんだ。さあ、次のワークシートにチャレンジしてみよう。

絵の具が乾く前に、くぎでひっかいてみたんだ。

釘の代わりに、鉛筆で引っ掻いてもおもしろいでしょう。

また、厚手の水彩紙などでは、絵の具が完全に乾いてから紙を引っ掻き、絵の具を剥がして、輝いている部分などを表現する方法も可能です。

ひっかいた上から、さらに絵の具をのせてみると、どうなるかな？



水でぬらした上に、絵の具を垂らしてみたんだ。

垂らす絵の具の濃さがポイントです。水の加え加減を試し、ちょうど良い濃さを発見させましょう。

絵の具に代えてカラーインクを使う場合はその心配がありません。色も鮮やかです。

題名を付けてみよう。どんなイメージかな？

指で描いてみたんだ。

指で描く場合は絵の具にある程度の濃さが必要です。指先で点描を試みたり、指の腹でこすったり、爪で引っ掻いたりして、マチエールのちがいによる表現の特色を感じ取らせましょう。

指の筆はどんな時に使えそうかな？

〈顔料〉 岩や鉱物などを砕いてつくった色の粉。現在は化学的に合成されています。
〈アラビアゴム〉 は食品にも使われています。松ヤニのまわりの黒い部分などはアラビアゴムを使っています。

© Kiyoshi Nakajima

水彩絵の具に挑戦（その２）

描くときは、いらない紙などに試してから挑戦してみよう。
乾燥する時間がないときはドライヤーなどを使うと便利だよ。

かさかさの筆で、描いてみたんだ。

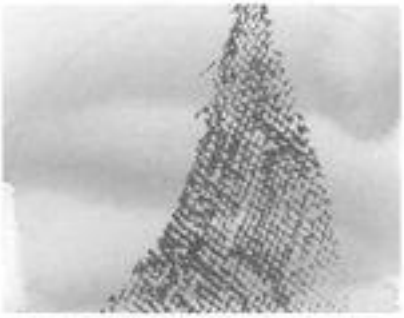
紙の凸凹を利用した技法です。ざらざらした感じなどを表現するのに使われます。下地の色を工夫することで深みのある色彩が生まれます。色の組み合わせによって感じる効果を、生徒同士で見せ合いながら考えさせても良いでしょう。

かさかさ筆に挑戦。どんな時に使えるかな。

ティッシコペーパーを使って、色をつけてみたんだ。

筆は様々な表現に便利な用具ですが、筆が不得意とする表現もあります。全て筆に頼るのではなく、必要に応じて自分で用具を選んだり、考えて作ったりする能力も必要です。

ティッシコに挑戦。どんな色と色とを使うとステキかな。



下地を薄くつけて、乾いた上から寒冷紗（かんれいしゃ）に絵の具をつけて模様を写してみたんだ。絵の具に筆を少し混ぜるといいよ。

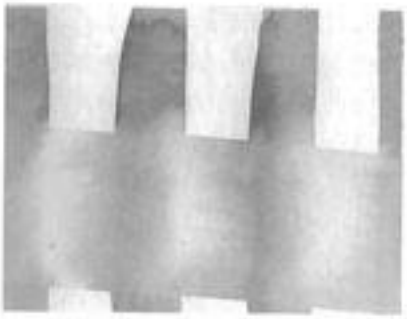
〈寒冷紗〉粗く平織りにした薄い綿布を、糊付けして固くせ上げたもの。

この技法は、素材の質感を生かした「スタンピング」技法で、版画の一種です。このようなスタンピングを使うことで、描くことが難しい表現も手軽にできます。

何を使って、模様を写してみる？

水彩絵の具に挑戦〈その 3〉

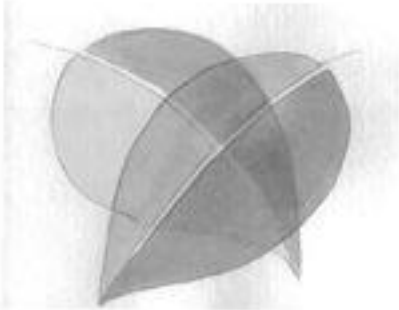
水彩絵の具と水は仲良し。水の量を調整しながら描いてみよう。このページは水を多めに。



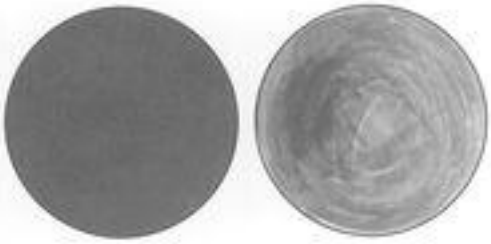
水と絵の具と、どっちが先？

水で描いた上から絵の具を重ねています。絵の具で描いた上から水を重ねた場合と仕上がりが異なります。ここでは、作業の順番が変わることで、出来上がる効果が異なることに気づかせましょう。友達と見比べて手順を教え合うことで気づくでしょう。

友達と比べてみよう。違いはどこかな？

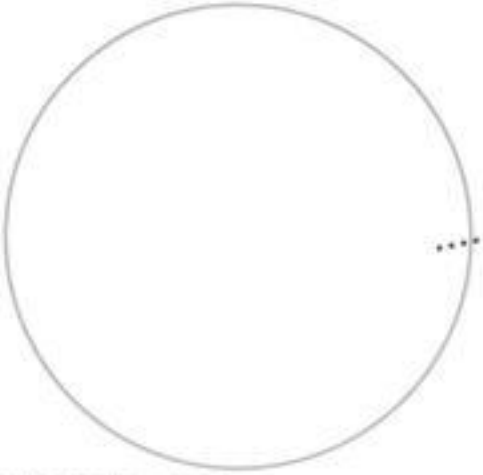


黄色の葉っぱの上から、緑の葉っぱを描いたんだ。
水の量と、先に描いた葉っぱをよく乾かすのがこつだよ。



左は最初に水だけで描いて、その上から絵の具をまったんだ。
右は薄い絵の具を何度も重ねて描いたんだよ。

好きな色で重ねてみよう。何色ができた？



筆あとを残さずに描いてみよう。

© Mizuno Takumi

＜水彩絵の具に挑戦＞は、絵の具で出来る表現の幅を感じ取らせる学習です。

〈水彩絵の具に挑戦〉に掲載した技法は、小学校までの造形体験でほとんど知っていると考えられます。ですが、あらためて取り組んでみると面白い技法です。

このワークの学習の目的は、ワークに示した技法を、表したい思いに応じて意図的に活用できる能力（創造的な技能）を身に付けることです。よって、単にこのワークをこなすのではなく、出来上がったシートを友達同士で見せ合ったり、クラスで鑑賞したりしながら、どのような表現に活用出来るか、また、効果があるかを、あらためて考えさせることが大切です。

よって、一度にすべてのワークに取り組ませるのではなく、題材に応じて、適切なワークを選んで取り組ませたりするとよいでしょう。

ワンポイント・アドバイス

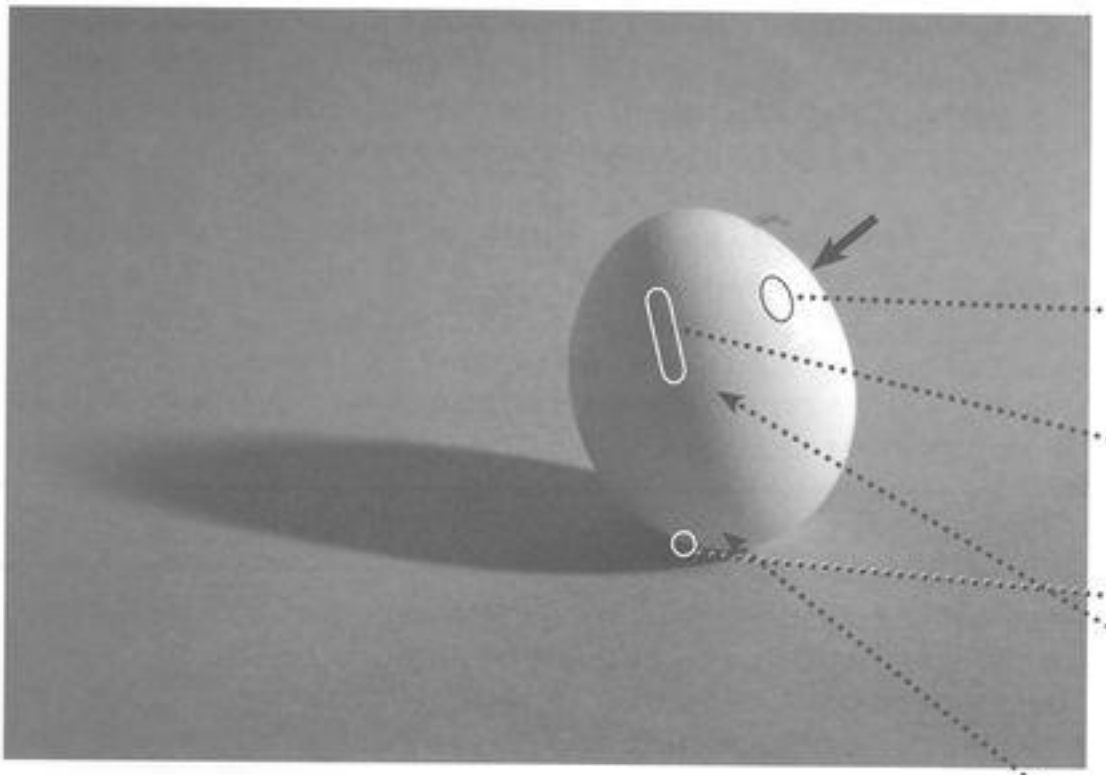
ワークシートの枠を生かす場合には、枠に沿って粘着の弱いマスキングテープで外側を被い、描かせた後からテープを剥がすと綺麗に仕上がります。ただし、ここで使用しているワークシートは画用紙を使用しているので、粘着の強いマスキングテープでは画用紙自体がめくれてしまうことがあります。その場合、枠に沿ってカッターナイフなどで、紙を切り抜かない程度に切れ目を入れてから剥がすと良いでしょう。

重色の学習です。透明水彩で用いる技法で、基本的には明るい色から描き、だんだん暗い色へと塗り重ねて進めていきます。風景画などでよく使われますが、理解のさせ方としては重なった部分は重ねる前より必ず暗くなるということをこのワークで押さえさせてください（＊減法混色）。よって、この技法を使うときには着彩計画が必要です。色をつけ始める前に、白以外のいちばん明るい色（明度の高い色）をベースにして、その上に重ねていくと良いでしょう。慣れると、描き始めは細部を気にしない大胆な描き方ができるようになり、全体を大きくとらえる力がつきます。

塗り跡を目立たせたくないときに使う技法です。先に水で描くのは、乾いた紙に水分をしみこませ、絵の具を乗せたときに顔料が直ぐに紙に吸い込まれないようにするためです。

筆跡を残したい場合は直接絵の具を重ねると良いでしょう。大切なことは、表現したい思いに合わせて描き方を使い分けられる能力（創造的な技能）です。

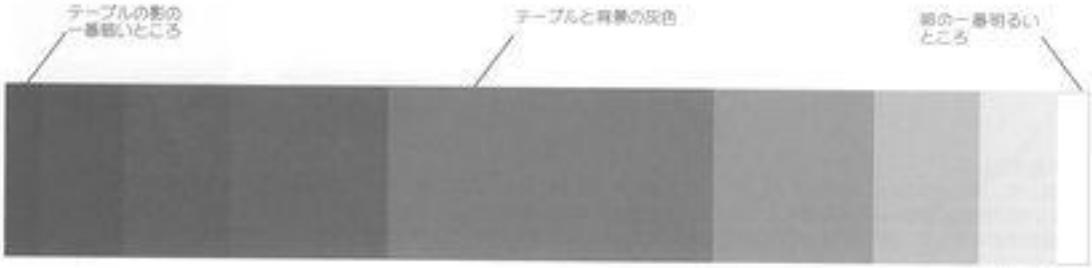
＊減法混色
黄、赤、青（イエロー、マゼンタ、シアン）の３原色から作る混色法。混色を重ねると、重ねる前より明度が落ち、最終的には黒に近い暗い灰色になる。よって印刷などではこの３原色の他に黒が加えられる。それぞれの頭文字などをとって、Y,M,C,K で表す。
減法混色に対して、光の色彩は加法混色である。光は、赤、緑、青、（レッド、グリーン、ブルー）が光の３原色と言われ、混色すると白に近づく、R,G,B で表す。テレビモニターなどが該当する。



卵をじっくり見てみよう

Q 1. 光はどちらから、どの角度で当たっていますか。矢印を書き込んでみよう。
Q 2. 卵のどの部分が一番明るく見えますか。
Q 3. 卵の一番暗い部分はどこですか。
Q 4. 画面全体で一番暗いところはどこですか。
Q 5. 卵の表面のざらつきがわかる部分はどこですか。
Q 6. なぜ、卵のざらつきが見えるのかな。考えてみよう。
Q 7. 卵の下部を観察して、どんなことに気づきましたか。
Q 8. テーブルに映った影を観察してみよう。
Q 9. 卵と背景の境目を観察してみよう。線はあるかな。
Q10. じっくりと卵を見て感じたこと、発見したことを発表し合おう。

だんだんと色などが変化していくことをグラデーションと言うんだ。上の写真のいちばん明るい色から暗い色までをグラデーションで表してみよう。鉛筆1本で描けるかな？それとも3種類（4H～2H, B, 2B～4B）ぐらい必要かな？



© Misawa Kiyoshi

このワークは、観察力（見る力）を鍛えるワークです。技術的に明暗を描き分けたり、鉛筆の表現を追求することを目的とした学習ではありませんが、見る力を鍛えることによって、それらの能力も付随して身につきます。

印刷なので、細部や明暗の見取りは難しい点もあります。必要に応じて実物を準備されると良いでしょう。手にとって観察が出来るので、より実感を得た学習が展開できます。

Q1.Q2. の問題に対して、ハイライトの部分を丸で囲んでみました。印刷状況によって確認が難しい場合もありますが参考にして下さい。なお矢印に関しても、3 次元的な角度を 2 次元で示す事に無理がありますが、おおよそ図のような矢印になるでしょう。

Q3. の問題に対して、一番暗いおおよその部分を示してみました。陰の部分が一番暗いと勘違いすることが多いと思われますが、目を細めて観察させると違うことに気づきます。

Q4. の問題に対して、一番暗いおおよその部分を示してみました。卵と紙の接点は、光が届かず一番暗いことがわかります。

Q5.Q6. ざらつきが見える部分は、卵の光が当たっている部分と、陰になっている部分との境目あたりが該当します。地球に例えると、朝の日の出直後と夕方の日の入り直前に該当する部分で、光が真横から当たることにより凸凹に必ず陰がはっきりと浮かび上がります。このことは夏の風景と冬の風景で受ける印象の違い（太陽の角度）、また朝昼の時間帯による陰の変化などとも関連づけて話すこともできます。

Q7 は、卵と紙の接している部分は、紙の反射光が卵の下面に当たり、陰の中でも以外と明るいことがわかります。多くの生徒は反射光の概念が無く、下だから暗いとか、または接地面付近は暗い部分であると考えがちですが、よく観察すると反射光の効果が理解できます。

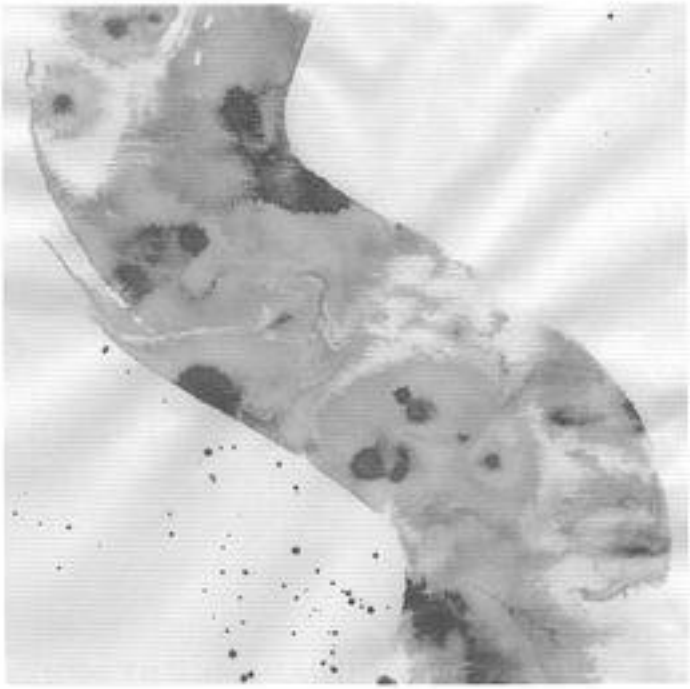
Q8 は、紙に映った卵の陰についても明暗が存在することがわかります。暗さについては、光が当たらない卵との接点が一番暗く、卵から離れるに従って、様々な場所からの反射光が影響し少しずつ明るくなっています。

Q 9. 私たちは物を描くとき輪郭線によって形を表したりしますが、よく観察してみると輪郭線は存在していないことに気づきます。明暗や色の違う面と面が接することによって、私たちはそこに線を感じるのです。

Q10. 気づいたことや思ったことを話し合うことで、学んだ内容が共有でき学習内容が定着します。

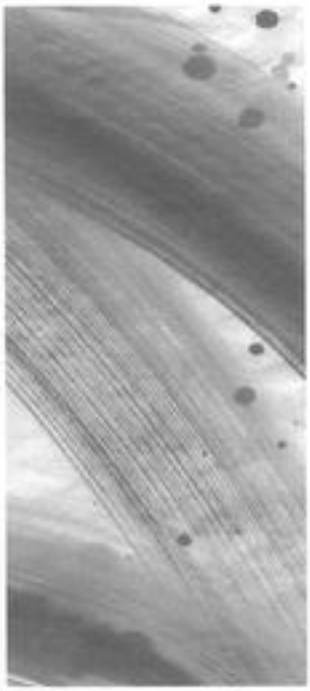
墨に挑戦

墨と水と…。どんな表現ができるかな。



はじめに、水を含ませたハケで、曲線を描いてみたんだ。そして水で描いた部分に、うすい墨、こい墨を垂らしてみたよ。

鉛筆でこの絵に何か描き加えてみよう。どんな絵ができるかな？



← ハケ全体にうすい墨を含ませてから、ハケの片側に、こい墨を付けて勢いよく動かしてみたんだ。

→ 筆の代わりに、たわしを使ったんだ。

↓ 何で描いたかわかるかな？
（ヒント：スパゲティーを食べるときに使うよ）

＊この3枚は半紙を使っています。

©Yuzuki Kyoto

「墨に挑戦」は、墨の魅力を発見するワークです。

墨の魅力は、単色でありながら、水加減や、使用する筆、また紙などの描画材によって実に様々な表情を見せます。このワークでは、いくつかの技法体験を通して、生徒一人一人が墨を使った表現のおもしろさや、可能性に気づかせていくことが目的です。

たらし込みの技法です。

たらし込みは、木の幹の表現や、苔むした岩などの表現などに多くみられる技法です。生徒が描き終えた段階で、たらし込みを使って描かれた作品の写真や、資料などを提示すると、よりその効果が実感できるでしょう。

鉛筆で書き加えることで、水墨画は墨しか使ってはいけないという生徒の考え方を壊すことが目的です。鉛筆で書き加えることで、鉛筆と墨との表現の違いを感じ取らせ、より墨の魅力に気づくことにつなげたいものです。

墨のにじみが生み出した形から見立ててイメージを膨らませたり、また、墨と鉛筆との表現の違いを発見させたりしながら活動させましょう。この体験を通して表現への発想を広げさせ、墨を用いて効果的な表現を追求できる創造的な技能の習得を目指します。

ここは描く道具の工夫を促すワークです。

幅広いハケを利用すると、ハケの幅でグラデーションをつくったり、細い筆ではできない表現が可能になります。

また、左図のように、たわしで描いたり、その下のフォークで描いた場合など、筆では表しにくい表現が生まれます。このような描画用具の工夫は思いがけない効果を発見します。道具や用具を工夫するおもしろさ（意欲）が、どのように道具や用具を工夫するかという思考（発想・構想）を喚起し、効果的な描画を追求する学習（創造的な技能）に膨らんでいきます。

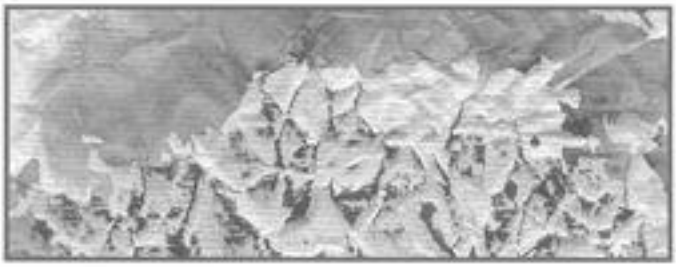
ワンポイント・アドバイス

多くの技法を試したりする場合は、ある程度の大きさの紙が効果的です。書き初め用紙や、思い切って障子紙のロール紙（約90cm × 7 m）を使うと良いでしょう。また、そこで使った障子紙などは、体育祭や文化祭のタイトルバックに利用したり、演劇の衣装に利用したり、工夫次第で様々なものに利用できます。

また、筆やハケ以外にも、網を墨に浸して紙の上にのせたり、材木に墨付けを行う墨つぼのように、墨糸を指で弾いてもおもしろいでしょう。

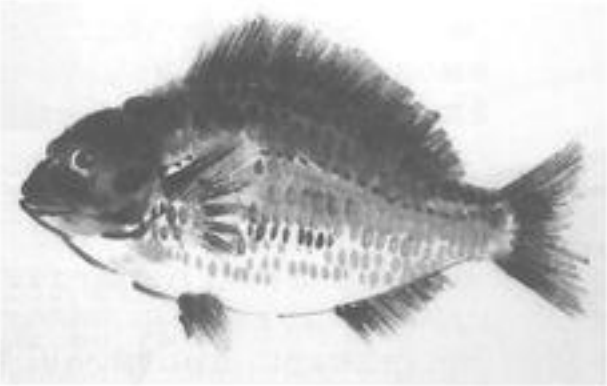
遊びから発見へ　発見から表現へ

くしゃくしゃにした紙に描いてみたんだ。
四角の部分を見ていたら、険しい山に見えてきたんだ。
この技法、生かせるかもしれない！



背中はウロコを描いてから、
薄い墨を上からぬったんだ。

ヒレはどんな筆づかいをした
かわかるかな？



お椀に、なみなみ水を
入れて、墨を垂らして写
し取ったんだ。（墨流し）

左の形を最初に写し
て、右が後から写したん
だ。重なった所が不思議。
墨は先に写した方が前
に出るんだ。

© Hirano Kyoko

「遊びから発見へ　発見から表現へ」は、表現への活かし方や墨の特徴について学びます。

今日、水墨画には様々な技法がありますが、それは最初から技法が決まっていたわけではありません。技法は今までの画家たちが、自分の表したい思いにあわせて、試行錯誤を重ね、発見したり、生み出してきた表現方法だと言えます。主な例で言うと、横山大観などが考えだした朦朧体（もうろうたい）などはその良い例でしょう。朦朧体は線を描かない西洋画の技法からヒントを得て生み出した技法（画法）と言えます。

つまり、なにげない墨遊びから生まれた表現でも、その特徴が作者の表したい思いにぴったりとはまったときに、それは作者にとって思いを表すために不可欠な技法となっていくのです。まずは、さまざまな表現技法を発見するために墨と親しんでみましょう。

紙をしわくっちゃにしてその上から描くと独特な表現が生まれます。生徒には、自分たちが試した描き方が、どこでどのように使えるかを考をえさせたりしながら、表現する際に体験した技法を活用させる能力を身に付けさせましょう。

一つのものでもさまざまな筆遣いを組み合わせて表していることに気づかせましょう。また、最初に描いた上から薄墨を重ねて表すことも体験させましょう。薄墨を重ねることで、絵に立体感や奥行きを与えることもできます。

筆は数種類用意させたいものです。新しい筆だけではなく、使い古したばさばさの筆なども特徴ある描き方ができるでしょう。

ワンポイント・アドバイス

墨が乾かないうちに上から墨を重ねた場合、必ず先に描いた部分が手前に浮き出して見えます。（乾いた上から重ねて描いた場合は、あとから描いた部分が前に出てきます）通常、透明水彩画などでは、色を重ねた部分は背後に後退しますが、墨だとそのようなことは起こりません。例えば、左の墨流しからもわかる様に、左側の円を最初に写し取り、その上に右側の円を重ねています。このような墨の特徴を知った上で、どのように描くかを考えて表すとよいでしょう。

また、墨と水の割合や、紙の種類によって、にじみ方が全然違ったり、筆の持ち方や動かし方を工夫することでおもしろい表現が生まれるのが墨絵の魅力です。まずは、思い切ってたくさん描かせながら、墨絵の特徴を把握させましょう。そして、表したい思いや内容に合わせた方法を選んで描けるようにさせましょう。